

津田梅子の生き方（13） ～女子英学塾設立～

梅子が帰国した明治 32(1899)年 に、日本では高等女学校令、私立学校令が公布されており、梅子が私塾を開く環境は着実に整い始めていました。

この頃梅子は、華族女学校のほか、女子高等師範学校でも教壇に立っていました。しかしどこで教えても、常に学校の方針に従わないといけな難しさを梅子は感じていました。このままでは自分が思い描く教育が実現できない。雇われの身ではなく、自ら理想の学校を創設するべきではないか。長いこと温めていた夢の実現に向けて、明治 33 年 7 月、梅子は華族女学校と女子高等師範学校での職を辞します。そして東京市麹町区 1 番町 15 番地に 2 階建て木造家屋を借りると、ついに「女子英学塾」を設立するのです。

開校にあたって、ずっと梅子の背中を押してくれていたアリス・ベーコンがアメリカから駆けつけてくれました。アリスは、来日を目前にフィラデルフィアに向かうと、梅子の友人や支援者を集めて会合を開きました。プリンマー大学の学長になっていたトマス先生がその会合で演説をして、「ミス・ツダの学校のための委員会」が発足したのです。「日本女性米国奨学金」を支えた人々が、今度は「ミス・ツダの学校のための委員会」に協力し、さらにこの委員会はやがて「女子英学塾のためのフィラデルフィア委員会」に名称を変えて、梅子の私塾の財政を継続的に支援することになりました。

入学試験を行った女子英学塾には、一期生として 10 名が入学します。開校式は、塾生のほか、教師・来賓計 17 名が参列しました。来賓の中には、ともにアメリカに渡り一緒に帰国した大山(旧姓山川)捨松も女子英学塾顧問としていました。梅子は、37 歳にして念願の私塾をついに開くことができたのです。

開校から 2 年後、女子英学塾での任期を終えたアリス・ベーコンが帰国すると、入れ替わるように今度はアナ・ハーツホンが 3 度目の来日を果たして教師陣に加わってくれました。1900(明治 33)年に 10 名の学生から出発した私塾は、校舎移転を続けながら、8 年後の 1908(明治 41)年には全校で 150 名にまで増え、「女子英学塾」の名は確実に広まっていきました。

ここからは、梅子の女子英学塾の開校式式辞を引用した、本校の令和五年度卒業式の校長式辞を紹介させていただきます。

「第一は本当の教育は立派な校舎や設備がなくてもできるものであるということであります。そう申したとて、私はよい教室や書物やその他の設備を軽んずるということではありません。出来ることならこれも完全にしなければなりません。真の教育には物質上の設備以上に、もっと大切なことがあると思います。それを一口に申せば、教師の資格と熱心とそれに学生の研究心とであります。とにかく、こういう精神的な準備さえできておりますならば、物質的の設備が欠けて居ようとも真の教育は出来るものであると、そう私は考えます」

この津田梅子の言葉は、まさに現代の教育においても忘れてはならない心得であると考えます。これから堀船中の生徒のみなさんが羽ばたこうとしている社会は、AI の急速な進化や技術革新に伴い、人の働き方や生き方を含めた社会全体の構造までが激しく変化していくことが予想されます。また、ロシアのウクライナへの軍事侵攻、イスラエルとガザ地区ハマスの軍事衝突もあり、混迷と閉塞感が世界を覆っています。こうした厳しい時代を生きる皆さんであるからこそ、津田梅子が言ったような「精神的な準備」が極めて重要です。凄まじいスピードで変わっていく社会の中で、新しく登場してきた何か、果たして正しいものかそうでないのかを、自分自身で判断できるようにならなければいけません。そのために必要な「精神的な準備」こそ、津田梅子が言う研究心なのだと思ひます。研究心を持つためには、自分自身の強い興味がなければなりません。それはつまり、何かをしたい、何かになりたいという想いのことだと思ひます。やりたいこと、なりたい自分を、ぜひ探してみてください。どんな小さいことでも、それが見つかったら、その気持ちを大切に育ててください。やがてその小さな興味が熱を帯びた研究心へと変わり、研究心が与えてくれた知識や考え方こそが、変化の速い時代にあっても、自らにとって正しい判断を行うことが出来る確かな根拠になり得るのです。



女子英学塾（一番町校舎）
【提供】津田塾大学津田梅子資料室



五番町校舎跡地（千代田区一番町 27 開新堂ビル南側壁面）